Las novelas de Emilia Pardo Bazán con escenarios gallegos.

Eizo Ogusu

ガリシア地方を舞台とした エミリア・パルド＝バサンの小説

Casa-Museo Emilia Pardo Bazán
+ (S8) mostra de cinema periférico.

Año dual España-Japón.
4-8/6/2014

Introdución e traducións:
Eizo Ogusu

Emilia Pardo Bazán (1851-1921) fue una de las intelectuales más eminentes de su época con una enorme producción literaria, escribió cerca de 700 cuentos, 32 novelas, 2.000 artículos de prensa, teatro, conferencias, ensayos, biografías, libros de viajes, crítica e historia literaria, todo ello con estilo y reflexiones punteras. Fue una de las primeras mujeres españolas que denunció el sexismo y demandó cambios para que la educación de las mujeres fuera una realidad.

La Casa-Museo está situada en la vivienda familiar de la escritora, donada a la Real Academia Galega por la última de sus descendientes.

エミリア・パルド＝バサン（1851-1921）は当時のスペインでもっとも著名な知識人の一人であり，膨大な数の文学作品を遺している。およそ700編の短編，32編の小説，2000編の新聞記事，戯曲，講演，エッセイ，伝記，旅行記，文芸批評や文学史といったあらゆるジャンルの作品を，鋭い考察と独特のスタイルによって著した。性差別の問題を提起し，女性の教育実現に向け改革を訴えた最初のスペイン女性の一人でもある。

現在，作家の家族が住んでいた邸宅は，最後の子孫の女性からガリシア王立アカデミーに寄贈され，「エミリア・パルド＝バサン生家・博物館」となっている。

Prefacio

Este folleto lo componen el íncipit original y traducido en japonés, y el argumento de las cinco novelas de la primera época de Emilia Pardo Bazán, que tienen su principal escenario en Galicia, su tierra natal y a la que la autora amó durante toda su vida. La acción de su primera novela *Pascual López* se ubica en Santiago de Compostela; la de su tercera novela *La Tribuna* en Marineda, que es nada menos que A Coruña; la de su cuarta novela *El Cisne de Vilamorta*, cuyo modelo es Carballiño; la de su quinta novela *Los Pazos de Ulloa*, que se considera como su obra maestra, y la sexta, que es su continuación *La madre Naturaleza* se desarrollan en la zona montañosa situada entre Santiago y Ourense.

はしがき

本編は，エミリア・パルド＝バサンが生まれ育ち，終生愛したガリシア地方を主な舞台とした，彼女の初期小説5編の「書き出し」と「あらすじ」をまとめたものである。小説第一作『パスクアル・ロペス』はサンティアゴ・デ・コンポステーラ，第三作『女弁士』はア・コルーニャをモデルとした町マリネーダ，第四作『ビラモルタの白鳥』はオレンセ県のカルバリーニョをモデルとしたとされるビラモルタ，そしてパルド＝バサンの代表作として知られる第五作『ウリョーアの館』とその続編『母なる自然』はサンティアゴからオレンセにいたる山間，といったようにガリシア地方各地で物語が展開する。

Pascual López. Autobiografía de un estudiante de medicina (1879)

No creo que venga a cuento para la narración de esta verdadera cuanto inverosímil historia, decir cómo fui por mis padres consagrado desde mi tierna infancia al arte de Hipócrates y Galeno, y cómo hube de dejar el regalo de los paternos lares por la estrechez de una mísera posada. Ignoro en qué particulares signos y marcas pude revelar disposiciones felicísimas y raras aptitudes médicas; pero es lo cierto que una mañanica me hallé en Santiago hecho estudiante.

第1作『パスクアル・ロペス：ある医学生の自伝』

両親がどのようにしてまだ年端もいかない私をヒポクラテスやガレノスの学術に仕向けたのか、そして私はいかに快適なわが家を出て，狭苦しく粗末な下宿屋に移らなければいけなくなったのかをお話しすることが，このまったく以て嘘のようだが真実の物語を叙述するのに適切だとは思えない。どんなに特別な兆候や特徴によって私が医者になるのに適した素質と類いまれな才能があるのを示したのか分からない。とにかくある朝，私は学生となってサンティアゴにいたことだけは確かである。

あらすじ

親元を離れサンティアゴ・デ・コンポステーラSantiago de Compostelaで自由放埒な学生生活を送っていた医学生パスクアルPascualは，親の依頼を受けた司祭ドン・ビセンテdon Vicenteの訪問を受ける。そして，悪友から引き離すために下宿を変えさせられる（第1章）。司祭の家でその姪パストーラPastoraを見初めたパスクアルは，彼女と結婚したいがために心を入れ替え熱心に勉強し，どうにか一年目の学年末試験に合格して帰省する（第2〜3章）。ところが，同じ下宿に住む裕福なビクトルVíctorもパストーラに気があり，この御曹司とパストーラとの結婚を望む母親は，娘とパスクアルとの付き合いを阻むようになる。また，高名な化学者，オナーロOnarro教授が大学に赴任してきた模様が語られる（第4章）。厳格で有名な教授がクラスで一番できの悪いパスクアルにたえず目をかけることから，彼が実はとくべつ優秀な学生にちがいないという噂が街中に広ま

り話題になる（第5章）。パストーラとのことを友人の司祭に相談したパスクアルは，たとえ彼が医者になれたとしてもその稼ぎでは到底パストーラ一家を幸せにはできないと言われ，金持ちのビクトルを妬みながらも，おのれの無力さに打ちひしがれ夜の町を徘徊する。そのとき偶然，オナーロ教授と出くわす（第6章）。教授は，パスクアルが科学的な名声にまったく無関心で，とにかく富を欲していることを確認したあと，彼に，ある実験の助手をしてくれるなら大金持ちにしてやろうと持ちかける（第7章）。教授の邸宅を訪れ，実験室に通されたパスクアルに，石炭からダイヤモンドを生成するという実験の全貌が明かされる（第8章）。実験について思いめぐらしながら一日を過ごしていたパスクアルは，昔の悪友に出くわす（第9章）。巨大で複雑怪奇な機械を使ってダイヤモンドを生成する第一の試みは成功を収め，パスクアルは小粒のダイヤを手にする（第10章）。パストーラからの手紙で彼女がビクトルの申し出を断り，ひとまず修道院に身を置くことを知った彼は，ダイヤを換金するためマドリードへ向かう。ところが，都会で慣れない大金を手にした彼は，恋人のことも忘れ放蕩三昧の生活を送り、全財産を使い果たす（第11章）。そんな折，パスクアルは，パストーラと教授から手紙を受け取り，急ぎサンティアゴに戻る。オナーロ教授のより大きなダイヤを生成する実験は成功をおさめるが，当の博士は感電死し，実験室も火に包まれる。パスクアルは，ダイヤ生成を証するためフランスの科学アカデミーに届けて欲しいと博士に頼まれていた箱を置き去りにしたまま，ダイヤだけを懐に入れ逃げのびる。パスクアルからことの顛末を聞いたパストーラは彼を叱責し，もらったダイヤを修道院の井戸へ投げ捨ててしまう。激怒したパスクアルはパストーラに暴言を吐き，その変貌ぶりに彼が真に望むものが自分の愛ではないと見て取ったパストーラは，修道女になる誓願を立てる。パスクアルはみずからの行いを後悔しながら，もとの貧しい医学生にもどる（第12章）。

tener algunos amores con alguna señorita, porque de antes an

? preguntaba Consolacion.

Teniente de Sobrado? Ese te estuvo fuera.... ~~es con~~ fué destinado á Pontevedra

sabe Dios! Ya es teniente. Ahora que me acuerdo.... Dice que

do debajo del balcon de la de García, y que la acompaña

no es así... exclamaba Ana volviéndose hacia una m

caramada sobre una almohada y que empezaba el ofici

on sus dedos ~~ahorcajados~~ amorcillados y torpes un pitillo.... Enrolla

la... Si vas con tanta calma, no ~~aprendes~~ te sale bien nunca. ~~Te~~ vera

ás deprisa... ahora va mejor.

Iré hoy á buscarte? proseguia Ana continuando u

hoy no... gracias Adios, con eso me esparciré un poco... le

¿de quien fué ese discurso de venir a esperarte?

un mujeriego! ~~Hace unos tan~~ Lo sacaria el de su cabeza, que

mejor barquillos.....

La Tribuna (1883)

第３作『女弁士』

Comenzaba a amanecer, pero las primeras y vagas luces del alba a duras penas lograban colarse por las tortuosas curvas de la calle de los Castros, cuando el señor Rosendo, el barquillero que disfrutaba de más parroquia y popularidad en Marineda, se asomó, abriendo a bostezos, a la puerta de su mezquino cuarto bajo. Vestía el madrugador un desteñido pantalón grancé, reliquia bélica, y estaba en mangas de camisa. Miró al poco cielo que blanqueaba por entre los tejados, y se volvió a su cocinilla, encendiendo un candil y colgándolo del estribadero de la chimenea. Trajo del portal un brazado de astillas de pino, y

夜が明けはじめた。だが、夜明けのぼんやりとした陽光はカストロス街の曲がりくねった小路にどうにか射し込む程度だった。その頃、ロセンド氏という、マリネーダの町でありがたいことにもっとも得意客が多く人気のあるウエハース屋が、みすぼらしい一階の家の扉をあくびしながら開け、姿をのぞかせた。その早起きの男は、兵役の形見の色あせた暗赤色のズボンをはき、上はワイシャツ姿だった。屋根の合間にわずかにのぞく白んだ空に目をやると、すぐに自分のコンロのところに行き、カンテラに火を入れ煙突の架け具に掛けた。玄関から松の薪をひと抱え運んできて、コンロの石のうえで

sobre la piedra del fogón las dispuso artísticamente en pirámide, cebada por su base con virutas, a fin de conseguir una hoguera intensa y flameante. Tomó del vasar un tarterón, en el cual vació cucuruchos de harina y azúcar, derramó agua, cascó huevos y espolvoreó canela. Terminadas estas operaciones preliminares, estremecióse de frío –porque la puerta había quedado de par en par, sin que en cerrarla pensase– y descargó en el tabique dos formidables puñadas.

うまくピラミッド状に組み、その裾にかんな屑をおいた。激しく炎を上げて燃えるようにするためだ。次に棚から大きな平鍋を取ると、それに円錐形の紙袋に入った小麦と砂糖をあけ、水を注ぎ、卵を割りいれ、シナモンを振りかけた。こうした下準備を終えたところで、男は寒さに身をふるわせた。というのも玄関の扉を閉じるなど思いもよらず、そのままいっぱいに開けっ放していたからだ。そして，壁をげんこつで激しく二回たたいた。

Al punto salió rápidamente del dormitorio o cuchitril contiguo una mozuela de hasta trece años, desgreñada, con el incierto andar de quien acaba de despertarse bruscamente, sin más atavíos que una enagua de lienzo y un justillo de dril, que adhería a su busto, anguloso aún, la camisa de estopa.

すると，隣の寝室，狭くむさ苦しい部屋からすぐさま，年の頃１３歳ほどのぼさぼさ頭の少女が，いきなり起こされて足取りもままならぬ様子で出てきた。粗布のスリップにドリル織りのベスト，まだ骨張った体にはりついた粗麻のシャツといっただけのいでたちだった。

あらすじ

マリネーダMarinedaのカストロスCastros通りにどうにか夜明けの光が射しはじめた頃，ウエハース売りのロセンドRosendoは下ごしらえに取り掛かる。すると寝室から13歳くらいの少女が駆け出してきて手伝いをはじめる。9時，5千ほどのウエハースができたところで少女はようやく朝食のパンにありつく。すると，隣室から不機嫌な声で「アンパーロ」″Amparo″と呼ばれ，やつれた女性の朝食を準備する。その後，手早く身なりを整えると，一人日曜日のミサに出掛ける（第1章）。3年前まで元気にタバコ工場で働いていたアンパーロの母親は突然病気になり，以来寝込んでいる。収入はとにかく無口な父ロセンドの稼ぎだけとなり，アンパーロも学校を辞めた（第2章）。外の空気を吸って人心地ついたアンパーロは，まず家でレース刺繍をする友人カルメーラCarmelaを誘う。しかし，仕事が忙しいと断られ一人ミサに行く。日曜日，マリネーダの街路では裕福な人びとが散歩しており，制服を着た将校たちとエレガントな娘たちのグループがベンチを陣取っている。一人の少尉が彼らをじっと見つめる貧相な少女に気付き，将来きっと美人になるとからかうと，その少女アンパーロは赤くなって駆けだした（第3章）。1年後の1月の夜，裕福な商人（Sobrado Hermanos）家では一族で唯一の男子バルタサールBaltasarの聖人の日が豪勢に祝われ，皆が着飾ってピアノの演奏を楽しんでいる（第4章）。嵐の中，そこに貧しい女の子の一団がタンバリンやカスタネットを鳴らしながら押しかける。中には赤ん坊を抱いた子もおり，アンパーロとカルメーラの姿も。彼女たちは少しでもお金を稼ごうとクリスマスの祝歌を歌って回っているのだった（第5章）。そこで出会った将校ボレンBorrénの推薦を受け，アンパーロはタバコ工場に職を得る。ロセンドは彼女の代わりに見習いハシントJacinto（「チント」″Chinto″）を採用することに。アンパーロは少しずつタバコの巻き方を覚え，次第に工場が好きになっていく（第6章）。村出身のチントはアンパーロを慕い，欠かさず工場の出口で待

っている。夏の午後，アンパーロはチントを避け一人帰る道すがら，バルタサール一家に出くわす。二人は一瞬見つめ合うが，バルタサールは家族の前で彼女に気付かなかったふりをする（第7章）。洗練された美しさを放つようになったアンパーロ。とくに，目と歯は申し分なく、バルタサールは彼女に惹かれはじめる（第8章）。1868年9月，スペインで名誉革命が勃発。マリネーダでは連邦共和制が支持され，タバコ工場もその活動の拠点となる。各部署で新聞の読み手が選出されるが，小さい頃理容店で読み聞かせをしていたアンパーロも選ばれる。新聞の論調を真似て読み聞かせているうちに，彼女は次第に弁が立つようになる。翌年の夏，工場はさらに政治的熱気にあふれる（第9章）。工場で大きな支持を受けていたのは地方新聞で，地元の出来事を採り上げた記事のときには，皆押し黙って耳を傾けた。また，不安や希望をかき立てる記事も女工たちの関心を引いた（第10章）。アンパーロは紙巻きタバコの作業場に移ったが，そこでは町の若い身綺麗な女性たちが働いており，二人の女工と友人になる。グアルディアーナGuardianaは亡くなった両親に代わって4人の弟を育てており，もう一人，30歳ほどのアナ　Ana "la　Comadreja"は仕事が速く稼ぎがいいが，気性の激しい痩せぎすの女だった。男性のことが話題になったとき，アンパーロは軍人が時折自分の後を付いてくる、とほのめかす。アナはそれがソブラード家の長男だと言い当て，その母親がいかにひどい女性かうわさ話をする（第11章）。衰えはじめたロセンドに代わってウエハースを作り，売り歩くようになったチント。水汲み，掃除から台所仕事，アンパーロの母親の世話まで彼が担う。ところが，ロセンド家では相変わらすラバのような扱いを受ける。たとえば，ブドウ酒の臭いをさせて帰ってきたときには通りに立たされた。そんな彼はロ達者なアンパーロに密かに思いを寄せていたが，逆に彼女は嫌悪感さえ覚えるのだった（第12章）。

女工たちは共和制になっても貧しさから抜け出せるわけではないと懐疑的だったが，徴兵がなくなると聞き共和制支持が高まる。新聞の風刺画の中で，君主制が年老いた老婆，対して共和制は若くたくましい女性によって表象されていたことから，アンパ

ーロは共和制のシンボルのような印象を町の人々に与え，ひとかどの政治家の扱いを受けるようになる。スペイン全土で伝統主義派と自由主義派，農村と都市の争いが巻き起ころうとしていたが，同じ対立が，工場でも町と田舎出身の女工たちの間で起きる（第13章）。夏の夜，ガルシア家の娘ホセフィーナJosefinaは，ソブラード家の娘たち（LolaとClara）とともに散歩をしている。流行の衣装に身を包み，気取りと尊大さが目に付く。人出が少ないことを嘆く彼女に，脇に付きそうバルタサールは，カンタブリアの代表団が北部協定を締結しにやって来るのを皆で迎えに出ているからだと答える。しかし，ホセフィーナは政治にまったく関心を示さない。バルタサールが彼女にメモをそっと渡したのを目にした母親（doña Dolores）は，ホセフィーナとその未亡人の母親と別れるため，皆を誘いカフェに立ち寄る。そして息子に，破産するかもしれないガルシア家に深入りするような振る舞いは慎むよう忠告する（14章）。バルタサールの紹介。何事にも熱を上げることなく享楽をモットーとする彼は，帰郷した友人ボレンに出くわす。二人で町を徘徊しながら，バルタサールはホセフィーナにそれほど惹かれるわけではないが，いきなり放り出すのは世間体が悪い，転属を願い出ようか，ここには気になる女の子もいるし、と相談する。娯楽協会のところに人が群がっていたので立ち寄ると，カンタブリア代表団をもてなす会が開かれていた。喝采のなか一人の女性が進み出て乾杯をおこなう。それは，あの少女だった（第15章）。アンパーロは刺繍仕事で腰の曲がったカルメーラにカンタブリア代表団の素晴らしさを熱く語る。しかし，これまでの政府と何が変わるのかと尋ねる彼女に上手く説明できない。カルメーラは，タバコの専売が廃止されたら刺繍と同じで競争が生まれ，工員たちは仕事を失うなど問題点を指摘する。次にやって来るカンタブリア・アルタCantabrialtaの代表団を、松明を手に迎えると興奮するアンパーロを尻目に，持参金があれば修道院に入りたいものだとつぶやく（第16章）。マリネーダの通りはその代表団を迎える人であふれ，松明を手にしたアンパーロは男たちの冷やかしの的となる。バルタサールとボレンもそこにおり人混みに紛れ声を掛けたが，政治的情熱に燃えるアンパーロは気にも留めない。連邦制を支持する女工の存在を中

央政府も知るはずだと想像し，彼女は活動に身を捧げる決意を固める。この結果，工場で朗読が禁止され停職処分を受けてしまう（17章）。歓迎の晩餐会。議論が盛り上がったところで，アンパーロ率いる女性の一団が招き入れられる。アンパーロが代表団の長老に花束を捧げ演説をはじめると，聴衆は拍手喝采。長老も彼女を「民衆の女弁士」"Tribuna del pueblo"と呼びたたえ，アンパーロと長老は感激にむせぶ（第18章）。北部協定締結に向けた会議。2万もの人が集まり，協定文が読み上げられる。政治劇に関心をもち，長老を始めとする代表団のうわさ話をしていたバルタサールとボレンは，赤い服のアンパーロに気付く。皆が息苦しさを訴える中，締結を祝って花，鳩，打ち上げ花火が乱れ飛び，音楽が高まる。そのなか，ウエハース売りの老人が倒れ運び出される（第19章）。

父親ロセンドの卒中による死。その数日前，彼は「民衆の女弁士」と呼ばれるようになったアンパーロに，二度と工場で新聞を読まないようにと強く注意していた。アンパーロは工場に戻り，チントも身を粉にして働き，一家は平穏に戻った。しかし，ある朝，アンパーロが着替えていたときチントがいきなり入って来て，結婚しようと告げる。アンパーロははじめ大笑いしたが，次に憤慨し迫ってきたチントをブーツのヒールで殴る。泣き入るチント。帰宅後，このことを母親に話すと，逆になぜ結婚を受け入れなかったのかと叱られる。しかし，アンパーロは帰ってきたチントにこれから家で寝ないよう命じる。怒ったチントは，ウエハース作りの道具を叩き壊してしまう（第20章）。チントは刻みタバコの作業場に仕事を見つける。様子を見に作業場を訪ねたアンパーロと友人アナAnaは，彼が薄暗いなかタバコに埋もれ働く光景に驚く。その環境の中で男らしい体つきになったチント。そして，二人は仲直りする（第21章）。カーニバルを祝う女工員たちの祭りの模様。女たちは，仮装しタンバリンとカスタネットに合わせて踊る。アンパーロは見習い水夫の仮装をする。歌と踊りに熱中し皆で作業場を練り歩くが，屋内の暑さに耐えられなくなり，夕方中庭に出て踊り始める。その様子を丘の上から眺める二人の男。バルタサールはボレンからタバコ女工たちのカーニバルについて説明を受ける（第22章）。暗くなり，二人は丘から降り

る。人の恋路ばかりに関心のあるボレンは，バルタサールをけしかけるが，彼は女工に手を出しマリネーダでスキャンダルの標的になるのを畏れる。最終的に翌日二人でアンパーロを落とすプランを立てる約束をするが，バルタサールにナバーラへの転属命令が出て頓挫する（第23章）。

憲法制定議会で君主制が選ばれ，北部連合が何ら実現しないため，アンパーロとその仲間たちは激高する。さらに，神への冒涜がタバコ女工たちを不機嫌にしていた。不思議なことに，革命が進むにつれ彼女たちの信仰心は高まっていったのだ。とくに，プロテスタントに対する反発は激しく，転向した女工はいじめにあい工場を後にするほどだった（第24章）。工場の外で催される女工たちの祭り（las comiditas）の描写。皆で昼食を取り，アンパーロと仲間たちが斜堤に寝転がっていると，二人の英国人が近付いてきて，本とパンフレットを手渡される。アンパーロはタイトルを見てプロテスタントの宣教師だと気づき，その聖書をバラバラにして投げつける。皆から物を投げつけられた二人は逃げ帰る（第25章）。その夜，政治状況に変化がなく，ふと寂しさを感じるアンパーロ。アナがバルタサールの話を持ち出す。アンパーロは結婚して裕福になった女工の話をし，社会階級など関係ないと主張する。対して，アナは同じ階級のほうが安心だと言い議論となる（第26章）。

ナバーラの戦場から帰還したバルタサールは意を決する。聖母マリアの潔めの祝日（2月2日），高まる情熱から彼はアンパーロを待ち受け，夕暮れ時二人きりになる。彼女の放つタバコの香りに魅されるバルタサール。日が暮れ風が強くなって，二人は寒さのため身を寄せ合う。意識してアンパーロに敬意をもって接するバルタサール。彼女は，彼が身分の高い女性に対するのと同じように自分に接してくれることに虚栄心をくすぐられる。手を握ろうとするバルタサールを一度は拒むものの，愛している，階級差など関係ないと主張する彼に手を許す（第27章）。アンパーロが友人カルメーラを訪ねたところ，いきなり喜び一杯に抱きつかれる。宝くじが当たり，それを持参金にして修道院に入るとのこと。カルメーラはアンパーロが「民衆の女弁士」と呼ばれていることや将校と付

き合っていることを心配する。対してアンパーロは，今では皆平等だと反論する（第28章）。アマデオ1世がスペインへ到着し王位を継ぐこと，タバコの葉の質が落ち乾燥してもろくなったこと，さらに支払いが滞っていることなどから，女工たちのイライラは増す。皆はアンパーロにすがるものの，彼女は役に立たない。心の中でバルタサールと結婚し，ソブラード家の奥様と呼ばれることを夢見てばかりいたからだ。女工は食料の掛け売りも認めてもらえなくなり，窮乏した者同士でお金を融通し合う。しかし，乱暴する夫に脅かされタバコを盗む女工まで出てくる（第29章）。アンパーロが母と二人移り住んだ地区の描写。子供たちはぼろぼろの衣服をまとっているが，帽子には気を遣う。また，天気がいいと皆が窓を開け放ち，家の中が通りから丸見え。商店は掛け売りを認めてくれる。近所の皆が，アンパーロが将校と付き合っていることを心配する（第30章）。

アンパーロはアナに，バルタサールはボレンに，二人の関係を話していたため，4人で会うようになる。3月から5月にかけて4人で野菜や麦が栽培されている畑に出掛け，イチゴを頬張ったりする。アンパーロはガルシア家の娘のことが気になりバルタサールにあれこれ尋ねる。いきなり帰ると言い出したアナをボレンが追いかけていき，アンパーロとバルタサールは二人きりになる。私と結婚すると神に誓うかと確認するアンパーロに，バルタサールは今では階級など関係ないと応え，最後にためらいながらも誓うと口にする（第31章）。その後，二人は郊外の休憩所で密会するようになる。ところが，会ってもアンパーロが彼のためにタバコを巻き，バルタサールは本を読むだけで，次第に会話が少なくなり，会う回数も減っていく。二人の関係を公にしたいアンパーロに，自分の家族やガルシア家に知られたくないバルタサールは嫌気がさしてくる。アンパーロは工場へ可能な限り着飾って行き，ご子息と結婚するのかと聞かれると，もったいぶった返事をする。他方，無駄遣いばかりする彼女に代わり，チントは寝たきりの彼女の母親を訪ね世話をするようになる（第32章）。

秋，母親がアンパーロを呼び，その顔を見るや恥知らずとののしる。結

婚する約束をしてくれたと弁明するアンパーロ。日曜日，いつものように休憩所で落ち合った二人は，ろくに会話もしない。バルタサールの脳裏にはガルシア家が訴訟に勝ったという母親の言葉が浮かび，アンパーロは自分の母親の言葉を思い起こしている。仕事が忙しいのであまり会えなくなると立ち去ろうとするバルタサールに，アンパーロは妊娠したことを伝え，結婚をせまる。彼は，今は出来ない，少し待ってくれと言うばかり。アンパーロは彼の前に立ちはだかり，皆にばらしてやると言い捨て立ち去る。残されたバルタサールは，彼女はそんなことをしない，一時期マリネーダを離れた方がいいと考える（第33章）。

アマデオ1世の退位。女工たち一同はアンパーロを欺した男を非難する。アンパーロも真の「女弁士」となり支払いの遅延を当局に訴える。支払いがない限り働かないと決めた女工一団は早朝，工場の門前に立ち並び，工員を通さない。検査官が現れても笛を吹き鳴らし抵抗する。一ヶ月分は支払うと約束した検査官に，働いた日数分支払うべきだと断固譲らず，ついに警備員が介入。皆追い出されるが，今度は，門前の舗石をはがし積み上げ，バリケードを作り出す。軍がやってくるという声。騎馬隊が到着し，散り散りに逃げまどう（第34章）。混沌とした政治状況がつづく。アンパーロは反乱以後，憔悴しきっている。アナを介してバルタサールに会いたいと伝えるが素っ気ない返事のみ。他方，彼はガルシア家のホセフィーナとよりを戻せず気を揉んでいる。アナはアンパーロに，ホセフィーナに手紙でバルタサールとの件を伝えるのが得策だと主張，二人で手紙を書く。しかし，アンパーロはこれで復讐できると思いながらも，結局投函できず，ちぎり捨てる（第35章）。1869年，アンパーロとアナはバレンシアで起きた事件をもとにした演劇を観に行く。共和派の主人公たちの勇猛さに感激するが，幕間，ボックス席にホセフィーナを見つける。観察していると，そこにバルタサールが現れ座る。アンパーロは手紙を投函しなかったことを後悔し，怒りに興奮，バルタサールの後を付け邸宅に投石しようと考える。結局，ドアにレンガで十字架を記しただけだった（第36章）。

アンパーロは朝，腹部に痛みを覚え，アナに産婆を連れてきてもらう。

La Tribuna (1883)

チントは産婆に言われるままさまざまなものを用意する。アンパーロのうめき声がつづくなか日が暮れる。時間がかかりすぎるため，夜医者が呼ばれる。そして，叫び声の後，産声が聞こえる（第37章）。翌朝アンパーロはチントに，子供が生まれたことをバルタサールに伝えてくれと頼む。戻ってきたチントは，街中が騒然としており，共和制になったこと，そしてバルタサールがマドリードに去ったことを伝える。髪を引きちぎるほど怒りに燃えたアンパーロは，人を集めてソブラード家に火を付けてやると咆える。もし良かったら俺が父親になるから結婚しようと告げるチントに，出て行けと言い返し起きあがろうとする。しかし，正義を，約束を守らせてやる，将校を殺す権利を，とわめきながら，また倒れ込む。その脇にアナがそっと赤ん坊を寝かせると，赤ん坊はアンパーロの胸を口でまさぐる。アンパーロの目から涙があふれ出す。外では，2月の寒風吹きすさぶ中，タバコ女工の一群の叫ぶ声が聞こえる：「連邦共和制，万歳！」（第38章）。

El Cisne de Vilamorta (1885)

第４作『ビラモルタの白鳥』

Allá detrás del pinar, el sol poniente extendía una zona de fuego, sobre la cual se destacaban, semejantes a columnas de bronce, los troncos de los pinos. El sendero era barrancoso, dando señales de haber sido devastado por las arroyadas del invierno; a trechos lo hacían menos practicable piedras sueltas, que parecían muelas fuera de sus alveolos. La tristeza del crepúsculo comenzaba a velar el paisaje: poco a poco fue apagándose la incandescencia del ocaso, y la luna, blanca y redonda, ascendió por el cielo, donde ya el lucero resplandecía. Se oyó distintamente el melancólico diptongo del sapo, un soplo de aire

松林のはるか向こうに，落陽が炎の帯を広げ，その帯の上に松の幹をあたかもブロンズの円柱のように浮き出させている。小道は深い溝だらけで，冬の大雨によってえぐられた跡を見せていた。ところどころ転がった小石が道を歩きにくくしていたが，それらの石は歯槽から抜けた奥歯のように見えた。薄明かりの物寂しさが風景にベールを掛けはじめていた。少しずつ日の入りの白熱光が弱まっていき，白く丸い月が空に昇ったが，そこにはすでに明星が輝いていた。ヒキガエルの物憂げな二重母音がはっきりと聞こえ，一陣の涼風が，道端に生えるしおれた草と埃まみれのキイチゴの茂みを揺り動

fresco estremeció las hierbas agostadas y los polvorientos zarzales que crecían al borde del camino; los troncos del pinar se ennegrecieron más, resaltando a manera de barras de tinta sobre la claridad verdosa del horizonte.

Un hombre bajaba por la senda, muy despacio, como proponiéndose gozar la poesía y recogimiento del sitio y hora.

かした。松林の幹はいっそう黒く，稜線の緑色がかった明るみを背景にインクの縦縞のように際立つのだった。

一人の男が小道を，その場所と時間のもつ詩趣と隠逸を享受しようとするかのようにとてもゆっくりと下っていた。

あらすじ

岩山の小道をゆっくり下りながら日の入りを愉しんだ男はこだまと対話した後，ベッケルの詩を朗唱する。通りがかった馬方たちに卑猥な言葉を投げられたこの男セグンド・ガルシアSegundo Garcíaは，気分を害しビラモルタVilamorta村に帰る。一軒の家で彼は30代半ばの太った女の腕に招き入れられる。かいがいしく彼の世話をする女に懇願され，「ビラモルタの白鳥」“Cisne de Vilamorta”というペンネームをもつ男は詩の朗唱を繰り返す（第1章）。弁護士の息子セグンドと村の小学校教師レオカディア・オテーロLeocadia Oteroが知り合ったのは，村の祭りで彼が詩を朗唱した時だった。両親がいないため預けられた叔父から暴行を受け，レオカディアは子供を生んだが，その子には身体に障害がある。今は村で教師をしながらその子とひっそり暮らしていた。ところが，読書好きの彼女はセグンドに出会い，詩人の彼に魅せられてしまう。対して，セグンドは大学を終えたものの詩作にかぶれ，父親や母代わりの叔母から疎まれている。そこでレオカディアの家に入り浸っていた（第2章）。村の二つの薬局に分かれて集う，異なる政党を支持する村人たちの様子。大臣ビクトリアーノVictoriano Andrés de la Combaが村にやってくることが話題になっている。セグンドの将来を憂う父親とそれに反発する息子（第3章）。ビラモルタに大臣家族が楽隊に迎えられ到着し，アゴンデAgondeの薬局に滞在する。セグンドは大臣を見つめながら，村の弁護士だった彼がここまで昇りつめた経緯を思い起こす。今回は，大臣の職を辞して，妻の実家へ転地療養に来たのだった（第4章）。翌朝，アゴンデと村医者　トロピエッソTropiezoが大臣の病気（糖尿病）について話しているところにコンバComba一家が下りてきて，皆で村の泉の水を飲みに行く（第5章）。その午後，名家の当主（señor de las Vides, Méndez）の迎えを受け，大臣一家は屋敷に向かう。村の一行も付き添い，大臣の妻ニエベスNievesとセグンドは言葉を交わす。これで何が変わるのかと自問自答する彼（第6章）。同じ日

の午後，セグンドに会えず落ち込むレオカディアは学校から帰宅後，障害のある息子ミンギートスMinguitosを見つめながら，これまでの苦しい日々，息子がこのような容姿で生まれてくるまでの経緯を思い起こし愛撫する。しかし，大臣一家を送ったセグンドが来訪したため，息子を独り残し彼の夕食の世話をはじめる（第7章）。その夜セグンドが詩作にふけっていた頃，レオカディアは彼が大臣夫人に思いを寄せているに違いないと嫉妬し，いつまでも眠れずにいた。翌朝セグンドを幸せにしたい一心で，彼のスーツを新調するお金の工面に走り回る。そして，セグンドの父親から借金した金を彼に渡す（第8章）。新しいスーツを着てメンデスMéndez邸を訪れたセグンドをニエベスが歓待し，菜園へ案内する。セグンドはメンデス家一同と昼食を取り，大臣に接近（第9章）。食後，詩人になりたいというセグンドに，ドン・ビクトリアーノは，首都における文壇の状況，政治家の悲哀を話し，ビラモルタに留まることを勧める。議席をめぐる陰謀の知らせが届き，独りにされたセグンドはニエベスと別れの挨拶をする（第10章）。

陰謀を解決するため村に戻った大臣一家に付き添うセグンド。ある日セグンドは女性の一群を山へ散歩に連れだすが，偶然ニエベスと二人きりになる（第11章）。ビクトリアーノとニエベスが結婚したいきさつ，夫があまりにも従順な妻に不満を抱いており，さらに政治の喧噪と病気のため二人の間に夫婦の営みもない。しかし30歳になるニエベスは第二の春を迎えている（第12章）。祭り前夜，大臣一派は役所のバルコニーから花火を見物している。セグンドはニエベスを観察しながら機会をうかがい，ついに人混みに紛れニエベスの腰に手を回す。しかし，彼女は何ら反応しない。広場でビクトリアーノの肖像が描かれた気球が浮かび上がるが，投げつけられた石で破裂し，炎に包まれる（第13章）。祭り当日，ニエベスはセグンドの昨夜の振る舞いを思い返しながら目覚める。窓から祭りの様子を眺める彼女は，彼との再会を恐れながらも待ち望む（第14章）。その夜，ニエベスは村の舞踏会に出席するが，田舎っぽさに幻滅した後はただ懸命にセグンドの姿を探すのだった（第15章）。

メンデス邸のブドウの収穫にビクトリアーノ一派が招待される。招待客たちのおふざけにニエベスも加わる（第16章）。セグンドが到着し，彼に思いを寄せる招待客の一人エルビラElvira Molendeは詩を朗読する（第17章）。他方，男たちはその年のブドウの出来を論じているが，ビクトリアーノだけは糖尿病が悪化し，白内障の症状まで現れてきたことを気に病んでいる。同時に，自分の容態に心を配らないニエベスに不満を抱く。皆でかくれんぼに興じるなか，ニエベスと二人きりになったセグンドは，彼女に自分への想いを口にするよう強いる。自分を愛しているのかとの問いに，ニエベスは「はい」と答える（第18章）。ニエベスは独り思案に暮れるが，セグンドも仲間から離れ一人松林に散歩に出かける。鍵が掛かっていたため土壁を乗り越え邸に入った彼を待ち受けていたのは，エルビラだった（第19章）。10月上旬，皆で松林に散歩に出るが，帰り道ニエベスと二人だけになったセグンドは山道から滑り落ちそうになった彼女を助ける（第20章）。その夜，再びバルコニーで二人きりになった際，セグンドはニエベスと翌日の昼寝時に居間で落ち合う約束をする。寝室でビクトリアーノはニエベスを自分の健康に気を遣っていないとなじる一方，セグンドには気をつけるべきだと彼女に注意を促す（第21章）。両親の会話を聴いた娘ビクトリアーナVictoriana（11歳）は，父親の容態を心配すると共に，好意を寄せていたセグンドが母親に恋していることを知り二人を憎悪する。翌日の昼食後，セグンドとニエベスが待ち合わせた居間に，それに感づいたビクトリアーナが父親を連れてやって来る。密会の現場を目にしたビクトリアーノはその場で糖尿病の発作を起こし，母娘は取り乱し助けを求める。ビクトリアーノはオレンセへ搬送されたが，数日後に死去し，母娘はマドリードへ帰る（第22章）。

凍てついた12月の夜，セグンドは自宅で行われている豚の屠殺に我慢ならず，レオカディアの家に行く。夏の間セグンドにまったく相手にされずやつれてしまった彼女は，彼を喜ばせようと手を尽くす。そんな彼女にセグンドは，たとえ費用がかかってもマドリードで詩集を出版したいという思いを語る（第23章）。セグンドは詩集を出版することでマドリードに帰ったニエベスの気を引こうと考えたのだが，

レオカディアは彼の思いをかなえてあげようと自宅を抵当に入れ費用を工面する。そのため障害のある息子のことを心配し，オレンセの商店へ働きに出す。その子のことを実の祖母のように心配する召使いフローレスFloresがレオカディアを責める（第24章）。友人を介してマドリードで詩集出版の作業がすすみ，3月詩集を受け取る。セグンドとレオカディアは感激するが，他の村人からは嘲りを受ける（第25章）。友人が送ってくれたマドリードの新聞の書評を読み，絶望するセグンド。その上，ニエベスが友人の持参した詩集を受け取ることさえ拒絶したこと，そして彼女が再婚する予定であることを彼の手紙で知る（第26章）。

セグンドは河岸をさまようが，自殺する勇気もない。数日後高熱を出し，それを心配するレオカディア。薬局の会合では，セグンドがアメリカに移民する話から，ビラモルタを庇護してくれたビクトリアーノを失った痛手とそれへの対策としてもとの対立候補を擁立する話へ（第27章）。

セグンドがアメリカに発ち，レオカディアは涙に暮れる。オレンセでひどく憔悴する息子に何もしてあげられないまま，夏の終わり自宅が借金の抵当に取られることになる。レオカディアはさまざまな計画を口にするが，結局何も実行できない。そして祭りの日，買い物に出掛けた彼女は毒を手に入れ，口にし，明け方死を迎える。数日後，薬局の会合で，レオカディアの自殺が取り沙汰されるが，話題はすぐに新しい村選出議員のおかげで設置される電報局，鉄道敷設の可能性へと移る（第28章）。

Los Pazos de Ulloa (1886)

第５作『ウリョーアの館』

Por más que el jinete trataba de sofrenarlo agarrándose con todas sus fuerzas a la única rienda de cordel y susurrando palabrillas calmantes y mansas, el peludo rocín seguía empeñándose en bajar la cuesta a un trote cochinero que descuadernaba los intestinos, cuando no a trancos desigualísimos de loco galope. Y era pendiente de veras aquel repecho del camino real de Santiago a Orense, en términos que los viandantes, al pasarlo, sacudían la cabeza murmurando que tenía bastante más declive del no sé cuántos por ciento marcado por la ley, y que sin duda al llevar la carretera en semejante dirección, ya sabrían los in-

その騎乗者がどれほど力いっぱい一本の手綱にしがみつき，押し止めようとなだめすかす言葉をささやいてみても，毛深いやせ馬は不揃いで狂ったような大股のギャロップではないものの，腸をバラバラにするような小走りで執拗に坂を下ろうとし続けるのだった。サンティアゴからオレンセに通じる国道のあの坂は真の急勾配で，そこを通る旅人たちが法律で定められた何とかパーセント以上の傾斜があるのではと首をかしげ，道をこうした方向に向けた際に技師たちはきっとたくらみに気付いたはず，どこかの政治家の別荘が近くにあったり，何か重要な選挙と関

genieros lo que se pescaban, y alguna quinta de personaje político, alguna influencia electoral de grueso calibre debía andar cerca.

係があるにちがいない，とつぶやくほどだった。

Iba el jinete colorado, no como un pimiento, sino como una fresa, encendimiento propio de personas linfáticas. Por ser joven y de miembros delicados, y por no tener pelo de barba, pareciera un niño, a no desmentir la presunción sus trazas sacerdotales. Aunque cubierto de amarillo polvo que levantaba el trote del jaco, bien se advertía que el traje del mozo era de paño negro liso, cortado con la flojedad y poca gracia que distingue a las prendas de ropa de seglar vestidas por clérigos.

その騎乗者の顔は赤くなっていたが，それはトウガラシではなくイチゴのようであり，リンパ体質の人間特有の赤味だった。若く，きゃしゃな手足でヒゲも生えていなかったため，もし聖職者の服装が否定しなかったら，彼は子供に見えたことだろう。というのも，やせ馬が小走りで掻きあげる黄色い埃まみれではあったが，その若者の服はゆったりと粗野にカットされた黒無地のウールで，司祭の着る在俗用の衣服を特徴づけるものだということがはっきりと分かったからだ。

あらすじ

急坂を駆け下りる馬を懸命に抑えようとする若い男。容貌と衣服から聖職者だと分かる。道すがら道路工夫や農家の女にウリョーアUlloa侯爵の館への道程を尋ねながら進む。道ばたの十字架に祈りを捧げていると，銃声が聞こえ，三人の男が路の傍らから降りてくる。一人目の猟師は28から30歳ほど，がっしりした体格の陽に焼けた男で新式の銃を担いでいる。二人目は古い銃を持った身分の低い中年男で，狡猾な顔をしている。三人目は聖職者の雰囲気を漂わせていた。侯爵の館への道を尋ねたところ，あなたが叔父のラへLage氏から紹介された人ですかと聞き返され，若い男は一人目の猟師が侯爵本人だと知る。紹介の後，皆で館に向かう（第1章）。

月のない闇夜，館に着き炉に炎が燃えさかる台所に通される。そこにいた若い女は夕食の用意を侯爵に問われ，慌てて支度にかかる。まず猟犬に餌が与えられ，犬たちがむさぼり始めるが，その中に年の頃3，4歳の男の子が混ざっており犬に噛まれそうになる。泣きじゃくる男の子に侯爵がワインを差し出すと，子供は一気に飲み干した。司祭フリアンJuliánが小さな子にワインを飲ませるのは毒ではないかとたしなめると皆が反論する。侯爵は良質のワインを持って来させフリアンに勧めるが，彼はほとんど飲めないと断る。その彼のワインを求める男の子ペルーチョPeruchoに，侯爵と主任司祭（三人目の猟師）はさらに飲ませる。すると子供は顔色を青くし頭を垂らした。申したとおりでしょうとフリアンがとがめたところ，二人目の猟師で執事プリミティーボPrimitivoがやおら子供を腕に抱き上げ，皆の制止も気にせず口に瓶をあてがい，ワインを流し込んだのだった。ペルーチョは死んだようにぐったりしてしまい，ベッドへ連れて行かれる。その後，フリアンも自室となる部屋に案内され，祈りを始めるが，疲労のあまりベッドに倒れ込む。（第2章）。

翌朝，フリアンはサベルSabelから，プリミティーボが彼女の父でペル

ーチョはその孫であると聞き驚く。侯爵に館を案内してもらい，荒廃した様子を目にしたフリアンは，文書保管室の整理に手を付けることを提案する（第3章）。フリアンは保管室で見つけた帳簿から侯爵家が明らかな破産状況にあることを知るとともに，そこから，館の主（Don Pedro Moscoso de Cabreira y Pardo de la Lage）の前史が判明する。幼くして父母を亡くしたドン・ペドロは叔父ドン・ガブリエルdon Gabrielに養育されたが，彼の死後，独りになり，用心棒として雇われたプリミティーボとその娘サベルと暮らしていること。また訴訟書類から，ドン・ペドロが本物のウリョーア侯爵ではなく，慣習から村人が館の所有者を侯爵と呼んでいるにすぎないことを知る（第4章）。フリアンは帳簿で得た情報から館の破産状況を改善しようと努めるが，プリミティーボの権力を思い知らされるだけで徒労に終わる。また，サベルの誘惑するような素振りにも耐え難くなる（第5章）。

フリアンは気の合う司祭ドン・エウヘニオdon Eugenioに招待され祭日をナヤNayaで過ごす。そこで，侯爵とサベルの関係，侯爵がペルーチョの父であることを聞かされる（第6章）。館に帰ると，台所でドン・ペドロがサベルを銃尾で打ち据え，ペルーチョも額から血を流し泣きじゃくっている。食事の準備を命じる侯爵に，サベルは出て行くと言い張るが，そこに現れたプリミティーボが侯爵の命令を聞くよう娘を諭す。フリアンは侯爵にサベルを館に置いておくべきではないと進言するが，そんなことをしたらプリミティーボに脅され誰も仕える者がいなくなると侯爵。それでは一時期ウリョーアを離れ分相応の妻を捜しに出てはどうかとフリアンが助言する（第7章）。翌朝二人はサンティアゴ・デ・コンポステーラへ発とうとするが，馬もロバも乗れない状況になっている。乗合馬車の通るセブレまで歩くことにするが，ドン・ペドロが周囲に目を配りながら歩んでいくと，茂みにフリアンに照準を合わせた銃が目に止まる。侯爵が逆にねらいを定めると，プリミティーボが林から出てくる（第8章）。

サンティアゴ・デ・コンポステーラのドン・マヌエル・デ・ラ・ラヘdon Manuel de la Lageの邸宅を訪れ，ドン・ペドロは叔父の4人の娘と対面

する。フリアンはこの家に仕える女中頭の息子である。娘の一人と侯爵を結婚させたい父親ドン・マヌエルは彼を歓待し，ドン・ペドロは4人をじっくり観察する。四女カルメンCarmenは美人だが惹かれない。三女マルセリーナ「ヌチャ」Marcelina "Nucha" は斜視で背も低く，容貌もそれほどでもない。二女マノリータManolitaはまた違うタイプで，愛嬌はあったが，少々男っぽい感じ。唯一，容貌も体つきもけちの付けようがないのが長女リタRitaであった。また，ドン・マヌエルには嫡男ガブリエルGabrielがいるが，17歳の彼は今セゴビアの砲術学校に学んでいた（第9章）。

皆で街を散歩していたときドン・ペドロは，マノリータとカルメンにはつきまとう男がおり，リタは視線を送る男たちをちらちら見返すことに気付く。彼に意見を求められ，フリアンは一人選べと言われれば末子ガブリエルの母親代わりを務めた三女マルセリーナだとアドバイスする（第10章）。ある午後，従妹たちとふざけ，いたずらをしたリタを追い掛けたドン・ペドロは，暗い部屋の中で間違えてヌチャを抱きしめてしまう。謝罪するドン・ペドロであったが，ヌチャは父親に兄弟でもない彼が一緒に住むべきではないと訴える。翌日からヌチャについて聞き回ったドン・ペドロは，彼女が名付け親の遺産を相続することを知る。そして，ある朝ドン・マヌエルにヌチャとの結婚を求める。思いがけない選択にドン・マヌエルは反対し，家中が緊張に包まれるが，結局二人は8月末に結婚式を挙げる（第11章）。

ドン・ペドロはフリアンを先にウリョーアへ帰し，花嫁を迎える準備をさせる。ところが，予想に反してプリミティーボはフリアンをセブレまで迎えに来たり，留守中に起きたことを報告したりと極めて協力的で，娘サベルも直に結婚すると言う。ひとまず安心したフリアンであったが，農園の管理はもっぱらプリミティーボがおこない，サベルもいなくならない。そんな折，名誉革命（1868年9月18日）の知らせが届く（第12章）。ドン・ペドロは次第にウリョーアを懐かしむようになり，義父と政治的信条の違いから喧嘩したこともあって帰省を決意する。馬車で村に到着し，ラバに乗れるかと尋ねられたヌチャは夫に何かをささやく。すると彼は飛んでいって，判事の

奥さん用の荷倉を付けた子馬を借りてくる（第13章）。懐妊を喜ぶドン・ペドロ。フリアンはヌチャにとってこの結婚が正しい選択だったのか思いめぐらしながら，引き続き居座るサベルの存在を危惧する。ある日，ヌチャは卵を盗もうとする男の子を見つけ，それがサベルの子ペルーチョだと知るが，以後ヌチャは彼の世話を何かと焼くことになる（第14章）。

モスコッソMoscoso夫妻は結婚報告のため，フリアンに付き添われ近隣の名家，裁判官，ロイロLoiroの司祭長，リミオッソLimiosoの館を訪問する（第15章）。懐妊後，日毎に元気で美しくなるヌチャに，侯爵は狩猟に出掛けることもなく付き添う。10月のある日，医者マックシモ・フンカルMáximo Juncalが呼ばれ，ドン・ペドロは乳母を捜しに出掛ける。しかし，ドン・ペドロが乳母を連れて戻って来てもまだ生まれていない（第16章）。あまりの遅れに皆が苛立つ中，医者は手術をすると宣言。フリアンは自室に戻り祈りを捧げ，夜が白みはじめた頃，「女の子だ」という声を聞いた途端に意識を失ってしまう。階下では，医者マックシモは上機嫌だが，ドン・ペドロは不機嫌。医者から，こうした出産の後でもう一人子供は難しいと言われたのだ（第17章）。

産後の肥立ちの悪いヌチャであったが，彼女を見舞うフリアンとともに，天使のような娘の成長を喜ぶ。他方，侯爵は，結婚する前のように猟に出掛け一週間戻らないことも。サベルも村の女たちを台所に集め，ペルーチョも姿を隠すことがなくなる。そんな朝フリアンはドン・ペドロの寝室からサベルが出て来るのを目にする（第18章）。こんな屋敷に留まるべきではないと考えながらも，二人を結婚させた責任を痛感し，赤ん坊のことを思いやるフリアン。ある夜，鋭い叫び声に駆けつけると，ヌチャが部屋の壁に張り付き，ドン・ペドロが彼女に迫っている。ただ，ヌチャが巨大な蜘蛛に怯え，侯爵がそれを潰そうとしただけのことであった（第19章）。翌朝，ヌチャを見舞うと，赤ん坊を脇に何もなかったように編み物をしている。その後，布地をさがしに二人で地下室に降りると，急に空が暗くなり稲妻が走る。激しい雷雨のなかヌチャが突然叫び声を挙げ，ヒステリー性の笑い声を発し始める（第20章）。ヌチ

ャの病状は快方に向うが，侯爵は相変わらず妻を気にかけず，狩猟に遠出することを計画。出発前夜，猟に参加する面々が館に集まり，これまでに狩った獲物について語り合う中，フリアンも狩猟に同伴せざるを得なくなる（第21章）。翌朝，狩り場に着くと，午前中はナヤの司祭ドン・エウヘニオに付いて回ったフリアンであったが，午後は皆の気まぐれから狩りへの参加をうながされる。しかし，猟犬が群れを追い立ててもしゃこの一羽も射止められない。夜，地面に俯せになってチャンスを待つ彼らの前で，雄兎は死を恐れず雌を求めて駆け回る（第22章）。ペルーチョはお菓子をくれるヌチャになついていたが，その関心は赤ん坊にも向くようになる。赤ん坊が機嫌が悪くとも彼に抱かれると穏やかになるため，ペルーチョに抱かせたまま沐浴させていたある日，ヌチャは「まるで兄妹のようだ」と口にする。その瞬間，フリアンの表情が変わったことに気付き，いきなりペルーチョを追い出し，彼に真実を話すよう要求する。ペルーチョはバグパイプ奏者の子だとしらばくれるフリアンであったが，ヌチャはペルーチョとサベルがここから出て行かない限り自分は気が狂ってしまうと興奮する（第23章）。

代々，二人のカシーケが権力を競い合ってきたセブレであったが，政治的思想と関係なくバルバカーナBarbacanaはカルロス主義，トランペータTrampetaは自由主義を標榜している。革命の時代，国会議員を選出する選挙が近付き，バルバカーナは教会と組んでドン・ペドロ・モスコッソを候補者にする。そのため大勢の人が邸宅に出入りするようになるが，ヌチャとフリアンは必要とされたときだけ会合に顔を出すにとどめ，荒れ果てた館の礼拝堂の修復に当たる。あれ以来，片時も娘を放さず，ペルーチョが近付くことも許さないヌチャであったが，日毎に活力を失う彼女の手首に，ある日，フリアンは青あざを見つける。フリアンがそうした状況でヌチャの手を取った瞬間，礼拝堂にドン・ペドロに案内された訪問客が入って来る（第24章）。トランペータが彼の陣営の県知事と選挙について話し合い，情勢が思わしくない要因としてプリミティーボによるドン・ペドロへの資金提供を挙げる。大臣の従兄を候補にした以上負けるわけにいかないと知事に言われ，

トランペータは策を練る。他方，ロイロの司祭長とナヤの司祭ドン・エウヘニオは，ウリョーアの館への道すがら，村人の間でささやかれている陰口について話す。侯爵は館に愛人と私生児を囲っており，その上奥さんと司祭の関係が怪しい。さらに，その噂を流しているのが館内部の人間，すなわちプリミティーボだというのだ（第25章）。選挙の日，トランペータは選挙妨害からプリミティーボを介しての有権者への恐喝まであらゆる策を駆使し，ドン・ペドロ票を減らす。結果，ドン・ペドロは敗北。バルバカーナ宅では，裏切り者プリミティーボへの報復を誓う。バルバカーナ陣営の面々は広場で勝利を祝い悪態を付くトランペータ陣営の者たちを鞭や杖で打ち据える。独り残ったバルバカーナは邪悪な形相の男（el Tuerto）と密談を交わす（第26章）。

夫が議員に選出されればウリョーアから出て行けると期待していたヌチャは失望し，健康状態を悪化させる。フリアンはドン・ペドロにヌチャを医者に診せるよう勧めるが，選挙で敵対した医者マックシモを館に入れることはできないと拒絶される。ある朝ミサの後，ヌチャはフリアンにこの結婚は失敗だった，ここにいたら邪魔な存在の娘は殺されてしまう，だから，ここから逃げ出すのを手伝って欲しいと懇願する。そして，二人で逃亡の段取りを話し合う（第27章）。その朝司祭からミサを手伝った駄賃をもらえなかったペルーチョは，代わりに祖父から手に入れようとプリミティーボのもとに駆け付け，奥様がミサの後司祭と二人だけで礼拝堂に留まっていたと伝える。それを聞いたプリミティーボはドン・ペドロを探しに飛び出して行き，ペルーチョも後を追う。先にドン・ペドロを見つけそのことを伝えたペルーチョは，約束された小遣いをもらおうと祖父を探す。森の中で一人の男（el Tuerto de Castrodona）と出くわしたペルーチョは，近付いてきた祖父が轟音とともに仰向けに倒れるのを目撃する。これを伝えようと山を駆け下り礼拝堂に戻ると，そこでは，ドン・ペドロがヌチャを大声で怒鳴り散らし，彼女を殴ろうとする彼に司祭フリアンが立ちはだかっていた。ペルーチョはドン・ペドロが妻のみならず娘まで殺してしまうのではないかと怖れ，寝ている赤ん坊を抱きしめ穀物倉に逃げ込む。トウモロコシの穂の中に寝かせ，

女の子が目覚めるとお話をしてあげながら懸命にあやす。そうしている内に二人して眠ってしまう。ペルーチョが悪夢で目覚めると，乳母が大声を上げ，赤ん坊は消えていた（第28章）。

フリアンはその日を決して忘れない。ヌチャとの関係をドン・ペドロに訴えられ，館から追い出されたのだから。フリアンは激昂し，大急ぎで荷物をまとめ館を発った。道すがら路傍の十字架のところで，地面に血まみれに横たわるプリミティーボを目にする。サンティアゴではウリョーアの出来事が取り沙汰され，大司教に尋問を受けたフリアンは，遠い山間の教区に左遷される。雪が降りオオカミの出没する教区で，貧しい羊飼いたちに教えを説きながら，次第に無感覚な人間になっていく。そんな彼のもとに，2年後，ヌチャの死の知らせが届く。そして10年後，真相が分かった大司教からの償いとして，フリアンはウリョーア教区へ転任を命じられる（第29章）。

まったく変わった様子を見せないウリョーアの館。対して，セブレ村では老いた領袖バルバカーナがトランペータに権力の座を譲るなど変化が見受けられる。フリアンが教会の薄暗い墓地に足を踏み入れると，白い蝶が彼をヌチャの墓に導く。墓石を抱きしめ泣きじゃくる彼の背後で笑い声が聞こえ振り返ると，二人の男女が立っている。一人はハンサムな若者，もう一人は11歳にしてはすらりとした女の子で，その歳の母親そっくりであった。だが，フリアンは信じられなかった。というのも，愛人サベルの子である若者は上等なウール地の服を身に着け田舎の紳士風であるのに対し，モスコッソ家の正当な後継者であるはずのヌチャの娘は古ぼけた綿の服に身を包み，ボロボロの靴を履いていたからだ（第30章）。

La madre Naturaleza (1887)

第6作『母なる自然』

Las nubes, amontonadas y de un gris amoratado, como de tinta desleída, fueron juntándose, juntándose, sin duda a cónclave, en las alturas del cielo, deliberando si se desharían o no se desharían en chubasco. Resueltas finalmente a lo primero, empezaron por soltar goterones anchos, gruesos, legítima lluvia de estío, que doblaba las puntas de las hierbas y resonaba estrepitosamente en los zarzales; luego se apresuraron a porfía, multiplicaron sus esfuerzos, se derritieron en rápidos y oblicuos hilos de agua, empapando la tierra, inundando los matorrales, sumergiendo la vegetación menuda, colándose como podían al tra-

薄いインクの層のような紫がかった灰色をした雲々が，空の高みにおいてまさに教皇選挙会に馳せ参じるように次々と集まり積み重なって，夕立となるかどうかを討議した。結局，夕立となる決意をかため，大きくずんぐりとした雨粒を放出することから取りかかった。その降り方はまさしく夏の雨で，草の葉先をねじ曲げ，キイチゴの茂みにけたたましい音を立てた。続いて，雲は我先にと競いあうようにそれぞれの力を倍増させ，激しく斜めに降る雨脚へと溶解して，地面を湿らせ，茂みを水浸しにし，微細な植物を水没させ，木々の樹冠を可能な限りすり抜け，とめどない涙のごとく幹をつた

vés de la copa de los árboles para escurrir después tronco abajo, a manera de raudales de lágrimas por un semblante rugoso y moreno.

Bajo un árbol se refugió la pareja. Era el árbol protector magnífico castaño, de majestuosa y vasta copa, abierta con pompa casi arquitectural sobre el ancha y firme columna del tronco, que parecía lanzarse arrogantemente hacia las desatadas nubes: árbol patriarcal, de esos que ven con indiferencia desdeñosa sucederse generaciones de chinches, pulgones, hormigas y larvas, y les dan cuna y sepulcro en los senos de su rajada corteza.

い，しわだらけで日に焼けた顔面を滴り落ちたのだった。

1本の樹の下に2人は隠れた。庇護してくれた樹は巨大な栗の木で，太く堅固な幹の柱の上に堂々とした広い樹冠をまるで建造物のように華々しく拡げ，雨を降らしはじめた雲に向かい勇猛に跳びかかるかに見えた。一族の長のような樹であり，ナンキンムシやアブラムシ，アリや幼虫の生殖の連鎖を冷たく無関心な態度で見つめ，みずからの割れた樹皮の内部にそれらの揺りかごと墓を与えていた。

あらすじ

夏のある日，森に雨が降り出す。二人は栗の大樹の下で雨宿りするが，用を足さなくなり少女のスカートにくるまって今度は石切穴に駆け込む。雨が止み，穴から出ると虹が架かっている（第1章）。二人が陽がかげり始めた山道を歩いていると田舎療法士のアントンAntónと出会い，彼に付いてマリア・ラ・サビアMaría la Sabiaの家に行く。そこで，ペドロPedroとマヌエラManuelaはまず腫瘍ができた雌牛の治療を手伝う（第2章）。牛の治療を終え酒に招かれた療法士は帰路につき，ペドロとマヌエラは道すがら彼から自然の力について話を聞く（第3章）。療法士と別れた二人は，子供の時のようにじゃれ合いながら，日暮れのなかウリョーアの館に向かう（第4章）。

ある日のこと。午後3時のひどい暑さの中，早朝サンティアゴを出発した乗合馬車が，セブレ村に至る急勾配を上っている。窮屈な車内で，トランペータは身なりの良い紳士に興味を抱き話しかけるが，男はウリョーアの館の話に関心を示すものの，寡黙なためなかなか正体をつかむことができない（第5章）。セブレの医者マックシモ・フンカルが草むらに寝そべってタバコを吹かしながら近付いてくる馬車を眺めていると，カーブでバランスを崩し，馬車が横転する。フンカルが駆けつけたところ，馬車から乗客が這い出してきたが，その一人の容貌が死去したマルセリーナ・パルドMarcelina Pardoに似ていたため親族の方では，と尋ねる。そこで，彼がマルセリーナの30歳代の弟ガブリエル・パルド・デ・ラ・ラヘ Gabriel Pardo de la Lageであることが明らかになる（第6章）。フンカルはガブリエルを自宅に招き，事故で痛めた腕の治療をしてやる。義兄の館に行くというガブリエルに，今夜はここに泊まり明日にしてはどうかと勧め夫婦で彼を歓待する（第7章）。その夜，涼みに出た中庭で一人たたずみながら，ガブリエルは自らの過去を思い起こす：姉のマヌエラ（マルセリーナ）に可愛がられた幼児期，カナリアを死なせたこと，中等学校に通っていた頃，セゴビアの砲

術学校で勉強にいそしんだ日々，姉の訃報を受け取ったときのこと，卒業後カルリスタ戦争に参加，除隊後クラウゼ哲学を勉強していたが砲兵隊が再編成され……，といった波乱の人生。最後に，この5月に，父の死に際し帰郷した家の書斎で，娘の将来を自分に託すと記した姉の手紙を見つけたところで「いま」の夜に戻る（第8章）。翌朝，朝食を取りながらマックシモとガブリエルは，ウリョーアの司祭などについて語り，互いに共感を覚える。そこでガブリエルは訪問の目的が亡き姉の娘と結婚することだと話し，どんな娘か尋ねる（第9章）。マックシモはガブリエルの問いに，義兄ドン・ペドロ，もと内妻サベルとその夫ガーリョGallo，サベルの息子のことなどを話す（第10章）。ガブリエルはマックシモの案内でウリョーアの館に向かう。途中，ペルーチョに話が及ぶ：小さい頃からマヌエラの子守をし，二人が仲の良いことなど。マックシモと別れたガブリエルは，一人館に向かう（第11章）。ドン・ペドロはガブリエルの突然の訪問を訝しみながら迎え入れる。小麦の刈り入れと脱穀の光景が描き出される中，ペルーチョとマヌエラが荷車の小麦の上に乗って現れる（第12章）。ガブリエルは二人を観察し，ペルーチョの美男ぶりを認めず，マヌエラの美しさをたたえる。ガブリエルの眼前でふざけ合う二人（第13章）。ガブリエルは館でガーリョとサベルに迎えられる。美貌を誇ったサベルの変わり果てた容姿に対し，紳士ぶったガーリョの外見と生活スタイルが語られる（第14章）。亡き姉の部屋をあてがわれたガブリエルは夜明けまで眠れず，朝寝過ごしてしまう。彼の意図を一刻も早く知りたいドン・ペドロに起こされ，ガブリエルはマヌエラと結婚したいと申し出る。ただし，無理強いではなく愛し合った上で。彼女の財産相続を一切要求しないという条件を聞いたドン・ペドロは，マヌエラを呼び叔父に館を案内するよう命じる（第15章）。二人になり，ガブリエルはマヌエラに母親や戦争の話をし彼女の関心を引く。そして，マヌエラの自然に関する知識や力強さに感心するのだった（第16章）。昼食後，マヌエラに粉ひき小屋へ連れて行かれたガブリエルは，そこで老婆とその孫たちが家畜に混じって貧困の中で生活しているさまに驚嘆する。二人は司祭に会いに教会に向かう（第17章）。司祭に仕えるゴーロスGorosの働きぶりから，司祭の質素な

生活が語られる。夕暮れ時，マヌエラに連れられ司祭館を訪ねたガブリエルはフリアンと再会する。しかし，彼の変貌ぶりとすげない素振りに早々と教会を後にする。館に近付いたところで，ペルーチョが姿を現し，マヌエラに明日は自分に一日中付き合うよう約束させる（第18章）。

早朝，館を抜け出したペルーチョとマヌエラは山道を登り，マリア・ラ・サビアの家で牛乳を飲んだ後，さらに山道を進む（第19章）。小川を渡り目的の地にたどりつき，蜜蜂の巣を見つける。蜂蜜をパンにつけむさぼりながらペルーチョは自分のことが好きかとマヌエラに問いただす。始めは本気にしなかったマヌエラも自分も好きだと告白。二人は結婚を約束しあう（第20章）。その後，城塞跡に登り，頂上の木陰で横になりながら初めて口づけを交わす（第21章）。

前夜のガブリエル。マヌエラのことを思い起こし，中々眠れない。何気なく手に取った本にペルーチョの幼少時の落書きを見つけるが，読書に没頭するうちに眠りに付く（第22章）。翌朝，マヌエラの迎えがないことを奇異に思い，ガブリエルはドン・ペドロのいる脱穀場に行く。例年ならドン・ペドロみずから脱穀作業を指揮するのだが，体力の衰えを感じ，代わりにペルーチョを指名していた。ところが彼が不在で，マヌエラと早朝出て行ったことが明らかになる（第23章）。ドン・ペドロとガブリエルは二人で昼食を取るが，互いに不機嫌である。ガブリエルはドン・ペドロに，マヌエラとペルーチョが二人きりで出掛けるのは問題ではないかと意見する（第24章）。ガブリエルはマヌエラを捜しに出たものの，どこに行ったのか見当も付かず当惑する（第25章）。日没が近付くなかガブリエルは山道に踏み込み，鐘の音に導かれ墓地にたどりつく。姉の墓を探したところ，その墓前で司祭フリアンが祈っているのが目に入る。墓を後にしたガブリエルは，暗闇のなか蛍光に照らし出された人影に気付く。それは，抱き合ったまま歩いて来るペルーチョとマヌエラだった（第26章）。館でいつもの寄り合いメンバーが集まっているところに，ガブリエルが戻ってきて，ペルーチョの居場所を尋ねる。ペルーチョを見つけたガブリエルは，ガーリョの居間ではじめ取っ組み合うが，その後，冷静さを取り戻し話し合

う。身分の異なるマヌエラに目を付けるとは，と詰め寄ったガブリエルに対し，ペルーチョは自分がいかにこれまでマヌエラの世話をしてきたか，これから二人どう暮らしていくつもりかを語る。ガブリエルは大事な話をするため，ペルーチョを自室に連れ出す（第27章）。そこでガブリエルはペルーチョに，彼がマヌエラの実兄であることを伝える。呻き号泣するペルーチョに，このことをマヌエラは知らないほうがいい，君はすぐさまここを出るべきだ，援助はするからと説く。真実を知りたいペルーチョはドン・ペドロのところに行く（第28章）。ペルーチョがドン・ペドロの寝室に入って行くのを見たガーリョはドアの前で耳をそばだてる。口論の後，飛び出してきたペルーチョはガブリエルの部屋に向かう（第29章）。

医者フンカルの家にガブリエルが馬を走らせ，ドン・ペドロとマヌエラの具合が悪く，とくに姪は前日の午後から神経症の発作を起こしており，すぐに診察して欲しいと訴える。道すがらガブリエルは，マヌエラの発作が一昨日の夜，息子の出奔を悲嘆するサベルから二人が兄妹だという事実を知らされたのが原因だと話す（第30章）。司祭館でゴーロスと療法士のアントンがウリョーアの館のこと，マヌエラの容態が悪く，ドン・ペドロも最期を迎えようとしていることを話す。アントンが出て行った後，犬が吠えだしガブリエルがやって来る（第31章）。ガブリエルは司祭の帰りを待ちながら，マヌエラとペルーチョについて考える（第32章）。帰宅した司祭にガブリエルは，ペルーチョが館を出て行きマドリードで働くことになったと伝え，もっと早くマヌエラに会いに来るべきだったと悔いる。司祭もしかるべき時に二人に兄妹であることを話すべきだったと悔やむ。最後に，ガブリエルはマヌエラが司祭に会いたがっていること，そして自分には彼女と結婚する意思があることを伝える（第33章）。二人は館に行き，フンカルと入れ違いに司祭がマヌエラの部屋に入る。フンカルは，ペルーチョの不在がマヌエラよりもドン・ペドロにショックを与えていると述べ，司祭にマヌエラを委ねたことを心配する（第34章）。司祭はガブリエルに，マヌエラが彼との結婚を拒み，神に仕えるためサンティアゴの修道院に入るのを望んでいると伝える。彼女には何の罪もない，幸せになれる

と主張するガブリエルに，司祭は，自然が過ちを犯したとき神の恩寵がそれを正すのだと説く（第35章）。ガブリエルはベッドに横になったままのマヌエラに，自分は孤独だ，ここで二人暮らそうと懇願するが，彼女は拒み，絶望しているペルーチョに会いに行って欲しいと請う。その日の午後，ガブリエルは館の全景を望む丘のいただきに立ち止まりながら，10日前にそこに探し求めてやって来たものが何だったか思い返す：「自然よ，おまえは母だと呼ばれる……　しかし，むしろ継母と呼ばれるべきだろう」（第36章）。

Índice

Prefacio 3
はしがき
Pascual López. Autobiografía de un estudiante de medicina (1879) 5
第1作『パスクアル・ロペス：ある医学生の自伝』
La Tribuna (1883) 9
第３作『女弁士』
El Cisne de Vilamorta (1885) 19
第４作『ビラモルタの白鳥』
Los Pazos de Ulloa (1886) 25
第５作『ウリョーアの館』
La madre Naturaleza (1887) 35
第6作『母なる自然』

Casa-Museo

EMILIA
PARDO
BAZÁN

[S8]

5ª MOSTRA
DE CINEMA
PERIFÉRICO

4 al 8 de Junio/June 2014 • A CORUÑA • SPAIN

2013
2014

AÑO DUAL ESPAÑA-JAPÓN
日本スペイン交流400周年
400 AÑOS DE RELACIONES